全教員参加による公開授業日の設定
―常葉学園大学のＦＤ―

平　沢　　茂
（教育学部教授・教育研究所所長）

２月25日（月）、筆者は、ＦＤの取り組みの実際を把握するため、常葉学園大学を訪問した。インタビューに応じていただいたのは、副学長／教育学部教授・角替弘志氏、及び授業方法研究・改善委員会委員長／教育学部教授・小田切真氏である。帰りがけには学長にもご挨拶の機会を得たので、率直な感想を述べさせていただいた。

詳細は以後の記述をお読みいただくとして、筆者の偽りのない感想を述べれば、大きな刺激と衝撃とを受けた、と言う他はない。その最大の要因は、いずれどの大学も着手せざるを得なくなる可能性のある「公開授業研究日」（授業研究会）を、昨年11月に、全教員参加のもとに実現させたことである。

この報告では、それまでの経緯と「公開授業研究日」の概要とを記して、参考に供すこととする。

１．常葉学園大学の概況

常葉学園大学は、教育学部、外国語学部、造形学部の３学部・６学科からなる大学である。学生定員は一学年480名で、学部数・学生定員など規模としては本学より小規模ながら、教員養成に関しては、静岡県での実績が高く評価されている。また、系列には、富士常葉大学、浜松大学、常葉学園短期大学があり、付属学校等を含め、学校法人としては、安定した経営基盤を持っている。また、2008年度には、教職大学院の設置が認可されており、静岡県を中心に、現職教員教育への貢献が期待されている。

本題に入る前に余談ながら、教職大学院の施設について、一筆しておこう。同学は、ＪＲ草薙駅からバスで10分ほどの、丘の上にある。静岡駅からだと、20分以上かかるものの、バスの本数も多く、本学の湘南校舎よりやや便利だとの印象がある。交通至便というわけではないが、さほど不便というほどのこともない。同学が会場となる学会でも、静岡駅周辺の宿泊施設を利用すれば十分に用は足りるのだけれど、同学には、そうしたときのために宿泊施設が用意されていた。筆者も、数年前、学会のために宿泊したことがある。早朝から大会運営に携わらなければならなかったので、この施設

は有り難かった。室数も潤沢で、室内もゆったりとしており、ロビーがことに有り難かった。前日の細々した打ち合わせは、ほとんどこのロビーで用が足りた。

学外者には有り難かったこの施設も、大学としては稼働率の問題があったとのことで、教職大学院設置に伴い、その一部が、大学院担当教員の研究室及び学生の研究室に模様替えされていた。ロビーも大学院生の利用を想定している。ゆったりしたスペースは、入学してくる大学院生にとっては、豊かな環境となるだろう。

同学と類似する面のある本学にとって、同学の有り様は、様々な面で示唆を与えてくれる、筆者はこのたびの訪問でその感を強くした。

２．ＦＤ推進組織の立ち上げと授業公開の試み

常葉学園大学におけるＦＤの取り組みは、2002年度にスタートしている。取り組みを進めたのは、「授業方法研究・改善委員会」（以下、ＦＤ委員会と記させていただく）である。ＦＤという語を耳にした場合の大学の教員の反応の多くは、次の2つになる。すなわち。①他人事、②反発、である。その重要性を認識する教員はもちろんいる。しかし、全体から見ればその比率は低い。このことは、どこでも同様で、例外はない。

ＦＤのスタートに当たって、そうした教員の意識改革をどう進めるか、それがまずは問題となる。

実は、本学（文教大学）にはその点で誇るべき実績を持っていることを記しておこうと思う。教育研究所が12年間にわたって刊行を続けている『文教大学の授業』である。他の教員の授業実践を知ってもらうことで、すべての教員に、自らの「授業」を顧みる機会を提供したい、とのねらいで刊行されているものである（これについて今は、ここまでとし、別の機会にあらためて省察したい）。

同学のＦＤに取り組んだのは、授業方法研究・改善委員会である。教員のＦＤへの意識改革をどう進めるか、やはりそれが最初の課題であったと思われる。初年度の取り組みは、「学生モニター会議」の設置である。

「学生モニター会議」は、教員と学生とが同席して、授業に関しての意見交換をする公式の場である。もちろん、最初の取り組みであり、教員の出席を強要することなどできるはずもない。しかしながら。出席した教員にとっては、予想以上に大きなインパクトを与えたようである。そのことは十分に理解できる。出席した教員は少数ではあっても、彼らに「授業」への意識付けができたであろうことは想像に難くない。

常葉学園大学の２年目の取り組みは、ＦＤ委員会の委員による公開授業の実施である。ＦＤ委員会主催の学内行事として行われた。教員の参加は当然とは言え。自由であって、参加した教員は少なかった。しかしながら、教員相互の授業評価という新た

な局面に立ち会った教員の意識は間違いなく変わった。

2004年度（３年目）には、ＦＤ委員会の委員が担当するすべての科目を常時公開とする取り組みが始まった。原義とは異なる今流の解釈で言うところの「隗より始めよ」というわけである。まずは、ＦＤ委員会の委員が身を以て範を示したのである。

こうして、2005年度には、全教員の全科目を常時公開授業とする取り組みに駒が進められた。と、書くと、ことは順調に進んだように聞こえる。しかし、実際は、「そうは問屋が卸さない」のである。すべての授業が公開されているとは言っても、他の教員の授業を参観しようという教員は、おそらくあまりいなかったに違いない。同学の名誉のために言い添えておこう。これは、同学に限ったことではないのだ。まさに、大学教員のＦＤに関する意識の問題なのである。

３．ストリーミング配信を活用した授業公開

そこで新たに取り組まれたのが、2005年度より計画された「ストリーミング配信を活用した授業公開」である。ただし、2005年度は、ストリーミングサーバーの設置及び配信方法等の検討を行い、実際に配信を始めたのは、2006年度からである。

この取り組みの最大のねらいは、授業が行われている時間に教室まで足を運ばなくても、都合の良いときに、研究室で、他教員の授業を見て研修することができる、という点にある。このねらいに沿って、収録・配信に当たっては、次の点を配慮した。

①　収録し配信する授業は、90分の授業をまるまる収録するのではなく、提案（収録された授業における授業担当者のねらいが明確に示されており、他教員からの意見を聞きたいと考えている）部分に的を絞る。

②　気楽に見られるよう、１タイトルの授業は、10分程度に編集する（10分というのは、この程度なら多くの教員が見てくれるだろうとの予測で決めたのだという）。

2006年度は、提案内容を「学習意欲と目的意識を高める効果的な導入の在り方」とし、14本の動画コンテンツを作成、配信を開始した。

2007年度の提案内容は「講義内容の確実な定着と発展的学習意欲を高める効果的な授業のまとめ方」とし、ＦＤ委員会の全委員が提案授業を行った。

各授業に関しては、授業のねらいや提案のポイントを示した公開授業講義計画書が作成され、公開されている。小学校等の授業に即して言えば、いわば指導案に類するものである。指導案と異なるのは、授業者による授業実施後の自己評価が掲載されている点である。ストリーミング配信を活用した授業公開では、すでに実施された授業が収録・配信されているので、こうしたことが可能となるわけである。

ストリーミング配信による提案授業（24本）は次のとおりである。

＜2006年度ストリーミング配信による提案授業＞

【学習意欲と目的意識を高める効果的な導入】

○前時の目標及び展開計画の明示

○前時の復習と本時の展開説明

○前時の復習と課題の確認

○前時の復習の位置付け

【効果的な導入を支える授業内容及びその技術】

○授業記録用紙の活用

○型を決めた導入(守)

○予習事項の討論の位置付け

○第１回目(ガイダンス)の導入

○説明活動の位置付け

○発表時間の確保

○班別巡回支援の充実

○条件制御による思考活動の誘発

○独自の発想を重視する場の構成(破)

○プレゼンテーションの位置付け

＜2007年度ストリーミング配信による提案授業＞

○「理科教育Ⅲ」(教育学部)

○「統計学Ａ」(教育学部)

○「青少年教育」(教育学部)

○「生活Ｉ」(教育学部)

○「学習心理学」(教育学部)

○「発達心理学」(教育学部)

○「教育方法論」(外国語学部)

○「英文法」(外国語学部)

○「ListeningⅡA」(外国語学部)

○「環境デザイン実習JJ（造形学部)

以上の取り組みに対するＦＤ委員会の自己評価は、次のようである。

「2006年10月の学内配信から2008年１月末日までの視聴回数（累計）は1146となっている。学内のみの配信であることと常勤教員数（受信可能な研究.室数）を考慮すると、ある程度の有効性が推察される。

また、コンテンツ視聴後に届いた感想の中には、「委員以外でも公開することは可能か」「次はぜひ私の講義を公開授業として録画して欲しい」「大人数の講義の実態を配信して現状を理解してもらいたい」等、様々な観点から「授業公開に対する積極的な参加意志」を見ることができる。委員だけでは十分な対応ができない状況ではあるが、本学教員の意識が改革されている成果のひとつである」（常葉学園大学　授業方法研究・改善委員会編『常葉学園大学の授業改善』2008年3月）

なお、ストリーミング配信された提案授業では、いわゆる指導案が作成されている。これについては、本稿の最終ページに一例を掲げておく。

４．全教員参加による公開授業日の設定

このような取り組みで駒を進めてきた同学のＦＤが、念願の全教員参加による公開授業日の設定を実現させたのは、昨年（2007年）11月14日である。通常の授業を休講にしての公開授業（研究授業）を実施したのは、おそらく同学が最初であろう。

この日のプログラムは、次の３つの内容によって構成されている。

①　ＦＤ委員会の委員による提案授業(10:00～11:00)

②　委員以外の教員による公開授業(11:20～12:20)

③　分科会（13:20～14:20）

①～③とも学科別（６学科）の授業、分科会が設定されており、教員は自分の所属する学科の授業、分科会に出席したのだという。提案授業、公開授業とも、60分なので、通常の授業枠より短くなっている。

当日のプログラムを紹介しておこう（担当教員名は省略）。

＜提案授業＞

「理科教育Ⅳ」
「青少年教育」
「学習心理学」
「教育方法論」
「英文法」
「景観論」

＜公開授業＞

「教育原理」
「生涯学習演習Ⅰ」
「発達臨床心理学」
「英語読解法ⅡＢ」
「スペイン語講読ⅡＢ」
「平面造形表現」

＜分科会＞

各分科会は、学科長、公開授業者、提案授業者が指定討論者として登壇し、それぞれの授業に関する討議をする形式で進められたようである。各分科会には登壇者の他に、講評者が設定されているので、最後のまとめが公表者によってなされたものと思われる。

通常の授業を休講にしての公開授業は、2008年度も11月12日に実施が予定されている。参観したい旨を告げたところ、かまわないとのことであった。日程の調整がつくようであれば、参観したいと考えている。

５．常葉学園大学のＦＤに学ぶべきこと―大学のＦＤの動向を踏まえて―

今、小学校では、校内授業研究会が行われない学校はほとんどないと思われる。ところが、中学校になるとだいぶ様子が異なっている。まだ、校内授業研究会を実施していない学校が少なくない。これが高等学校になると校内授業研究会を実施している学校ほとんどないと言ってよい。

大学は高校以下かと思うと、これが違うのである。20年ほど前、日本では18歳人口の減少による大学冬の時代の到来が叫ばれ、「氷河期」と表する識者も少なくなかった。「アメリカの大学に学べ」というのが、当時の関係者の合い言葉であった。アメリカの大学は、当時、氷河期における生き残りをかけた戦いを終熄させていた。生き残った大学が新たな安定期を迎えつつあった。日本におけるＦＤは、ここから人口に膾炙するようになった。

当時、筆者は亜細亜大学で教員をしていた。この大学は、学長の強力なリーダーシップの下で、ＦＤの推進が試みられていた。全国的にも早い時期の事例であったと思

う。学内で、学外者を招いてＦＤの公開討論会が開催されたり、全国の経営学部の大学教育研究会が本学を会場として行われたりと、積極的な取り組みが行われていた。筆者も、専門分野の関係で、否応なく関与を求められた。しかし、それでも、全教員の意識改革への道は遠く、次の展開を考えなければならないと考えていた矢先、本学に移ることになって、私自身のＦＤへの関与もいったん終熄したのである。

当時、私が考えていたのは、「学生による授業評価は、ＦＤの中核ではない」ということであった。その考えは今も変わらない。安易に行われた授業評価は、「百害あって一利なし」というほどではないにせよ、誤った情報を提供する可能性があるということだ。

それよりは、むしろ、大学の教員が「授業設計」（授業者自身による授業の評価が可能な授業の設計）についての認識を深めることが喫緊の課題だと考えていた。先の全国の経営学部の教育研究会では基調講演の機会を与えられてその話をしたところ、直後にいくつかの大学の経営学部に呼ばれて、授業設計の話をする機会が与えられた。

日本における大学の氷河期は、これからが本番である。生き残りをかけた本格的な戦いが、今、始まろうとしている。国立大学は、眠れる獅子であった。ゆったりと寝ていてくれれば良いものを、法人化が進められたため、目を覚ましつつある。私学にとっては大変な脅威である。その国立大学でも、ＦＤは急速に進みつつある。

今回報告した常葉学園大学のＦＤは、現段階では最も急進的な事例である。しかし、数年後には、類似の事例があちこちで見られるようになるに違いない。通常の授業を休講にしてというのは、難しいにせよ、授業研究会は、大学においても日常的な姿になっていく可能性が大きい。

本学の入学生の質的変化もこのところ急速である。４月からの新しい年度の授業に関して、様々な新しい試みをしなければならないと考えている。その工夫が十分につかないうちに、授業開始の時期を迎えてしまう可能性もある。けれども、泣き言を言ってはいられない。ただ、こうした努力も個人的には限界がある。

たとえば、多人数授業は、大学では当たり前の風景であった、しかし、学生の質的変化を考えれば、当たり前の風景だと言ってはいられないはずだ。来年度、少しでも個人指導の工夫をつけたいと考えても、100人を超える授業ではまず無理な話だ。こうなると大学全体として、授業の質の改善を図る取り組みが不可欠となる。

常葉学園大学の試みは、その意味で貴重である。授業改善のための課題には、個々の教員の工夫と努力だけでは解決の難しいものもあり、そうした問題を全教員で共有するためには、常葉学園大学で行われたような試みも必要なのである。授業改善の研究会において忘れてならないのは、個々の教員の工夫を喚起するだけでなく、組織と

しての授業改善への取り組みの視点を育てることであろう。

5. 教育学部　A　　先生

月日	11月14日(水)1コマ	教室	3号館 3418教室			
授業科目名	単位数	講・演・実	年次	期別	担当教員	
学習心理学	必・選 (2)	講	3	後	A	

本時の目的・内容

対象：教育学部心理教育学科3年次　64名

目的：「意識的／無意識的記憶（顕在／潜在記憶）」について理解し，記憶の保持のしくみについて体系的に理解する．

内容：本授業は，人間の「学習」や「記憶」について体系的に理解することを目的としている．本時は記憶の保持（貯蔵）のしくみについて，顕在／潜在記憶をとりあげる．本時までに，記憶成績に影響をあたえるといわれる符号化の違いや，記憶の保持のしくみについての古典的な理論を紹介している．本時では，これまでの授業内容を背景に，私たちが普段あまり意識しない「記憶」のしくみについて，「潜在記憶」をトピックとしてより深い理解につながる内容を展開する．

本時における提案事項（授業方法の工夫など）

○「学習意欲と目的意識を高める効果的な導入の在り方」としては

・前時に配布・回収した「感想シート」をもとに，学生の質問や感想に答える時間を設ける．

・「学習心理学」講義全体のアウトラインを毎回提示し，本時の授業内容が他の授業内容とどのような関係にあるかを意識させる．

・本時のキーワードを提示し，講義中での提示と併せ，繰り返し提示することによる学習効果をねらう．

○「講義内容の確実な定着と発展的学習意欲を高める効果的な授業のまとめ方」としては

・本時開始時に提示したキーワードをテーマごとのカテゴリーに区分して再度提示し，本時に提示された知識や情報を学生各自に整理させることを促す．

・「感想シート」を配布し，本時の簡単な授業評価とともに，感想や質問を書いてもらう．次回その内容についてフォローすることで，学習意欲の維持を試みる．

本時の評価（参観の視点）

○「感想シート」による前時のフォローは効果的であったか

○導入時のアウトラインおよびキーワード提示は，知識定着に効果的であるか

○プレゼンテーションソフトによる授業展開，および時間配分は適切であったか

ストリーミング配信された授業の「指導案」の例（常葉学園大学　授業方法研究・改善委員会編『常葉学園大学の授業改善』2008年3月より）